

日本語学習の支援とは…

10月3日、「日本語学習支援ネットワーク会議 2015 in FUKUSHIMA」が福島大学で開催された。私は初めての参加だったが、東北地方から大勢の関係者が参加しており、日本学習に対する関心の高まりを感じた。

プログラムは、齋藤隆さん（福島県国際交流協会）の報告「福島県における外国出身者の状況」、堀永乃さん（グローバル人材サポート浜松）の基調講演「多文化パワーと地域創生～未来をデザインする日本語支援」、午後は分科会A「学習者の日本語教室とは?」、分科会B「社会参加につなげる支援のあり方」、分科会C「外国にルーツを持つ子どもとその家族」。そして、まとめの全体会。



私は午前中の基調講演のラスト30分から参加した。講師の堀さんの話がとてもパワフルで面白く、内容も、この手のテーマにしては日本ではありがちなものではなく、これまでになかった視点を提示したものだ。

その内容は、日本語教室は教室の枠を超えて社会に出て、そこで学習者の自己実現のお手伝いをするのが重要だということ。学習者にとっては、職場やコミュニティに飛び込んでそこで学ぶ日本語だからこそ本当に使える生きた日本語をしっかりと身につけることができ、同時に自分に自信を持って自立することができる。したがってこれからの日本語学習支援は、そこまで視野に入れて活動しなければならない、という。しかもそれは、移住者のためだけでなく、日本人や日本社会にとっても、多様性を受け入れることによって、より寛容な社会になれることから、とても有意義なことだ、と。私も、彼女の考え方に大賛成。

●深見明子 (EIWAN 協力委員)

福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR福島駅西口から徒歩7分)
電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com
ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>
フェイスブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

堀さんの団体では、職場研修を行ったり、学校でモンゴル人の助けを借りてゲルを作ってそこで子どもたちに異文化体験をさせたり、ベトナムから来た人たちに、ベトナム人ならではの知識や経験を生かせるNPOに参加してもらい、そこでリーダーシップを発揮してもらおうなど、教室外の活動支援をたくさん行っている。これにより、外国の人たちにも他の日本人と同じ住民としてコミュニティの中で活躍してもらいながら日本語を身につけてもらう、そんな日本語教室の活動をしているようだ。

日本語に限らず、語学学習は「使ってなんぼ」の世界なので、閉じた教室の中でおさまりのフレーズを練習したりノートに書き取り練習をするよりも、堀さんの活動のほうがより効果的で、しかも同時に語学の枠を超えて社会全体の異文化や多様性に対する価値観を転換させることも可能だと思う。



午後、私が参加した分科会Cでは、会津の小学校で日本語指導教室を担当されている那知上恵一さんの話と、山形のこども日本語サポートネット代表の長藤節子さんの話を聞いた。

二人の話を聞いて、とにかく大変だなあという印象を受けた。特に那知上先生のお話は、相変わらず何でもかんでも学校に押しつけようとする行政の現場に対する無知・無関心・無責任を強く感じた。もっとコミュニティや社会全体で、子どもたちの支援をどうするか関心を寄せ、具体的に行動していく必要があると思う。ただ、分科会では時間が足りず、二人の話の後の議論はあまり深まらなかった気がするが、現状を知ることができただけでも、とても有意義だった。



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

Empowerment of Immigrant Women Affiliated Network

第11号

◆発行◆ 2015年11月11日 (隔月刊)

福島のお母さんたち、 大阪の多文化教育の現場を歩く

中国にルーツを持つ子どもたちを対象に、継承語教育に取り組んでいる福島のお母さん（移住女性）たち——須賀川市「つばさ」から2人、いわき市「心ノ橋」から3人、郡山市「幸福」から1人、そしてEIWANから1人、計7人が参加して、10月19～21日、「継承語教育」大阪研修プログラムを実施した。現地のコーディネーターは、4月に須賀川市で開催した「ふくしま子ども多文化フォーラム」で講演してくれた金光敏さん。



10月19日朝10時、伊丹空港に降りると、東北よりうんと暖かく、青空が広がる秋晴れ。金光敏さんが空港まで出迎えてくれ、まずは、金光敏さん所属のコリアNGOセンターへ向かった。事務所は、日本一大きいコリアタウンに位置する。韓国の食品店やレストラン、雑貨屋、化粧品ショップ、民族衣裳の仕立屋などが並び、“ここは日本ではない”と感動した。在日韓国・朝鮮人がここで集中して生活している様子や、「大阪生野区は外国人住民の割合が五分の一で、日本最高」と金光敏さんが説明してくれた。

昼食に本場の冷麺をいただいてから、午後、大阪府教育委員会を訪問。



人権教育企画課の尾形さんが各部署を案内してくれ、外国にルーツを持つ子どもの教育について大阪府の取り組みについて話してくれた。活字資料だけではなくDVDもあるインデックスから閲覧すると、

府内の外国ルーツ生徒統計資料、民族学級が置かれている学校リストやそこで使用する教材、サポーターの民間団体リストなどが収録されていた。

その中のDVDを見せてもらい、堺市にある成美高校の部活の様子に、みんな目を丸くして驚いた。部活の名前は「中国文化春暁倶楽部」、内容は中国民族舞踊や獅子舞、ドラゴン舞……。年間40回ほどの出演要請の人気ぶりで、インタビューされた生徒が「練習は大変ですが、みんなの拍手は僕たちの励み」と答えている。



次の目的地は、外国ルーツの子どもたちの学習支援教室「こどもひろば」。会場は「大阪国際交流センター」という立派な建物の1階にある。学習だけではなく、放課後の居場所の提供にもなっている。事務局長の鶴飼聖子さんと、「にほんごサポートひまわり会」の齋藤裕子さんが、サポートの歩みを語ってくれた。特に齋藤さんが教材作りの一環として作った、中国語ピンインから検索できる辞書や、家庭医療用辞書は、みんなの喝采を浴びた。

外へ出た時、もう星空だったが、みんなの感動と議論はますます白熱。大阪名物のお好み焼きを食べながら、一日の感想を語りあった。



20日9時出発、門真市立砂子小学校を訪問。この小学校では3割弱が中国系の児童で、主に残留孤児の後代。校内放送はすべて日・中2カ国語、校歌は日・中・英3カ国語と多文化が徹底している。

中国ルーツの子どもは、国語の時間で別の「陽光教室」へ抽出授業、他の科目は個人差で判断して、小人数の「陽光教室」か、日本人の児童と一緒に授業を受ける。週1の継承語教室もある。この「陽光教室」の在籍児童は42名。

また、中国ルーツの子どもたちのために、倉庫を改造した専用の図書館「読書の森」がある。読書レースという形式で、日本語を話す・聴く・書く・読むの4領域で子どもの力を伸ばす。45分の授業時間内で好きな本を一冊選び、それを読み、あらすじを書き、写真を撮り、先生が評価を書く、それで1ページのアルバムを作る。1冊の読書が終わると、金のシール1枚を読書レースポスターに貼ってもらえる。アルバムをデコレーションで飾ったり、いっぱいになったら子どもにプレゼントする。そのアルバムを見ると、1年間で感想文の内容や質が上達していることが分かる。強制的ではなく、子どもに寄り添って、読書に興味を徐々に持たせる素晴らしい取り組みである。



午後、守口市立錦小学校の民族学級を訪問。放課後の民族学級には在日韓国・朝鮮人と朝鮮族ルーツの9名、日本人の応援団もいる。児童たちは韓国の民族楽器の練習。11月に学区で秋季学校発表会が控えているので、子どもたちは力が入る。守口市教育委員会の山口さんが説明してくれた。市内で民族学級を開設しているのは小学校が9校、中学校が3校。目標は語学を学ぶだけではなく、自分のルーツに誇りを持てるように、自信につながることだ、と。



次は、「Minami ども教室」の見学。難波周辺の繁華街で働くシングルマザー家庭の子どもたちのために放課後の居場所づくりとして始まったという。ほとんどの生徒は同じ学校で、ちょうどその学校の校長先生も見学に来ていた。学習は3つのクラスに分かれて、小学校低学年、小学校高学年と中学生、高校生。またサポーターも、大勢登録している。



夜、外国ルーツの子どもたちの教育支援に取り組んでいる教員やNGO関係者との懇親会が開かれた。

互いに語り合い、悩みや辛さも話される。その話を聞きながら、大阪での素晴らしい教育環境は、保護者や教育者、サポーターたちが長年の努力でつくりあげたことがよく分かった。



21日9時出発。大阪市立阿倍野中学校の日本語指導センター校を訪問。ここは大阪府が設けた日本語指導の拠点校。小学校低学年の児童に対してはサポーターが小学校へ行くが、高学年から拠点校へ半日通うシステム。その日、生徒は4人、来日したばかりで2カ月～半年程度。3人は中国人、1人はフィリピン人。通う期間は個人差があって、何カ月から何年と異なる。専用の教材を使って、母語とやさしい日本語でサポートしている。ここの教材も数多く、素晴らしい。



ここで、研修プログラムは終了。帰りの飛行機までのわずかの時間、希望者で古都・奈良へ向かった。日本の文化遺産もふれて、帰路へ。帰り道、みんな興奮状態、これから福島で頑張ろう、と話し合った。

● 裘哲一 (EIWAN 運営委員)



バスツアー「いわき～那須高原」

10月17日、「秋のリフレッシュ・バスツアー：那須高原」を実施した。いわき市の中国人コミュニティ「心ノ橋」の12家族・32人（うち子ども10人）、「EIWAN」から二人、「いずみ」から一人（明石義信牧師）、計35人が参加した。

参加者のほとんどは、那須を訪れるのは初めて。また、移住女性たちにとっても「初めての遠足」。早朝7時にいわき市役所前を出発して、雨が降り出す中、那須サファリパークに到着。園内を回る「ライオンバス」に乗り換える。ベンガルトラの迫力に大人たちは声を挙げ、子どもたちはキリンやヤマにバスの窓からエサを与えては大歓声。

そのあとレストランで、バーベキュー。当日来れなくなった8人分の食材はキャンセルできず、みんな食べることにしたが、あつという間になくなるほど、子どもたちの食欲は旺盛。

ライオンバスの前で記念写真を撮ったあと、りんどう湖 LAKE VIEW に向かう。そこでは、雨も止んで秋晴れの下、大人も子どもも思いっきり体を動かして遊んだ。



今回のバスツアーは、日本語のほか中国語と英語でチラシを作って宣伝したためか、中国人グループでは途中で人数を制限する一幕もあった。結果的にフィリピン人たちの参加がかなわなかったが、今後

とも呼び掛けていきたいと思う。



いわき市の中国人コミュニティ（そのほとんどが日本人男性と結婚した中国人女性）によって自助組織「心ノ橋」が結成されたのは、2014年1月。5月から彼女たちは、子どもたちに対する継承語（中国語）教室を月2回、市の文化センターで始めた。私たちは何回となく教室を訪ねては、その活動を側面から支援してきた。

バスツアーを通して、子どもたちのお父さんやおばあさんたちとも親しく話すことができ、被災者の日ごろの率直な思いに触れたことは、とても良かった。



帰りの車中で書いてもらった参加者のアンケートには、日本語や中国語で「たのしかった」「来年もぜひやってほしい」と書かれていた。やはり、福島の子どものお母さんたちにとっては、短期であれ、保養プログラムが必要なのである。

なお今回のツアーは、企画・広報・準備などを「EIWAN」が担い、バス代・入園料・食事代など諸費用の全額を「日本基督教団東北教区放射能問題対策室いずみ」が支えてくれた。心から感謝したい。

● 佐藤信行 (EIWAN 代表)

